2004- 8

札響くらぶ

第29号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

16年度総会が行われました

上田会長が再任

本年度の札響くらぶ総会が６月５日（土）午後５時から渡辺淳一文学館で行われました。

冒頭に、進行役の西川事務局長から「５月末現在で会員数が600人の大台を超えた」ことが報告されました。

続いて上田会長が開催の挨拶の中で「昨年の市長就任に当たり、皆さんから提言された、市内の小学校６年生全員にキタラで札響を聴くチャンスを、という声を実現させました」と述べ、札響くらぶの活動の重要性を訴えました。

㈶札幌交響楽団専務理事の西村義信氏、札幌交響楽団事務局の大島雅志氏の来賓挨拶の後、武藤義典氏を議長に選出して議事に入りました。

議案審議では「平成15年度の活動報告･決算報告･監査報告」が承認され、続いて「平成16年度の活動計画・会則の一部改正・予算」の審議が行われ、了承されました。また、今年は２年に１度の役員改選の年に当たっており、総会で選出されることになっている会長、会計監査の選出が行われ、会長には上田文雄氏が再任、会計監査は細川馨氏が再任、新たに笹原俊一氏が選出されました。また、今年４月ハイメスの副理事長に就任された顧問の竹津宜男氏から、多忙で兼務は難しいとのことから顧問を辞退したいとの申し出があり、了承されました。（活動計画の概要等は４ページに）

その他として、新方式に移行した第６回札響くらぶコンサートの結果報告があり、また、出席者からファミリー会員制度の実施時期等の質問があり、西川事務局長から「今年度から実施し、分りやすい案内文書を送付したい。会報は１ファミリーに１部送付になる」との回答がありました。

総会終了後、昨年から実施されている室内楽のミニコンサートを楽しみました。

昨年は豊平館を会場に、コンサートマスターの菅野まゆみさん達によるカルテットでしたが、今年もヴァイオリンに市川ヴィンツェンツォ・土井奏、ヴィオラに辻彩子、チェロに坪田亮の皆さんによるカルテットでエルガー「愛の挨拶」、レスピーギ「イタリアーナ及びシシリアーナ」、モーツァルト「弦楽四重奏曲ニ長調K.421」が演奏されました。熱のこもった演奏で、出席の皆さんが堪能されました。

最後に、アンコールでヨハン・シュトラウスのお馴染みの「ラデツキー行進曲」が演奏され、楽しく手拍子で締めくくりました。

札響くらぶは札響を愛する人達の札響応援団です

指揮者に聞く

札響には多くの勉強をさせていただきました!!

元札幌交響楽団指揮者

末廣（すえ） 誠（まこと） さん

末廣　誠さんのプロフィール

1959年鹿児島市生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学研究科卒業。指揮を秋山和慶、堤俊作、ハインツ・レークナーの各氏に師事。1991年第4回フィッテルベルク国際指揮者コンクールで優勝し、第1位ゴールドメダルオーケストラ特別賞を合わせて受賞。

その後、ポーランド放送交響楽団、シレジア・フィルハーモニー管弦楽団等、主要なオーケストラに招かれ、常に高い評価を得ている。また、国立シレジア歌劇場でのプッチーニ「トスカ」でヨーロッパデビューを果たした。これまでにクラフコ放送交響楽団首席客演指揮者、国立シレジア歌劇場首席客演指揮者を歴任。

国内では、宮城フィル（現仙台フィル）指揮者、群響指揮者を歴任。1995～99年の4年間札響の指揮者を務めた。

特に、日本人指揮者では少ないオペラ、バレエ等の舞台作品の分野での卓越した才能で評価されている。

5月30日、翌日の「加藤登紀子コンサート2004 TOKIKO LOVE SONGS with 札響」の練習を終えた直後の末廣さんに、芸術の森でお話を伺いました。

―― 鹿児島のお生まれで鹿児島大学出身というと、下野竜也さんの先輩ということになりますか。

末廣　そうです。でも、大学で一緒になったことはありませんから、私より4・5歳は下なのではないでしょうか。

―― 大学卒業まで、ずっと鹿児島だったのですか。

末廣　そういうことになります。大学受験の時に東京の音楽大学と、親の希望もあって地元の国立大学を受験して両方合格しました。どちらにも興味はあったのですが、その頃はまだ将来プロの音楽家になるぞ、という気持ちも固まっていませんでしたし、なれるという保証もありませんでしたから、まあ、大学を出てから音楽をやりたければもう一回音楽大学に行けばいいやと思い、逆は出来ませんでしょう、ということで鹿児島大学に入学して卒業と同時に桐朋学園に入り直したということです。

―― 音楽との出会いはどんなことでしたか。

末廣　ずいぶん昔なので定かではありませんが、はっきり覚えているのは、小学校1・2年の頃ですが、親にねだって当時の音楽のソノシートを何枚か買ってもらって小さな蓄音機で聴いていました。最初に買ってもらったソノシートの両面にオッフェンバッハの「天国と地獄」の序曲と「魔法使いの弟子」が入っていました。いまでも演奏すると思い出してしまいます。で、私は覚えていませんが、親に言わせると、そういう曲を何度も傷つくくらい聴いて、聴きながら箸を持って手を動かしていたというんです。まあ、その頃から漠然と興味を持っていたのでしょうね。

―― 実際に指揮者を目指すようになったのはいつ頃ですか。

末廣　大学に入った頃でしょうか。

―― 桐朋を出られてすぐにその活動を始められたのですか。

末廣　いえ、私は正式な留学の経験はないのですが、桐朋を出てから3・4年間でしょうか、ぶらぶら旅をしていました。ヨーロッパのあちこちにいたり、日本に戻ってきたりという感じでずっと動き回っていました。その間に何度かコンクールも受けましたが、91年のフィッテルベルクでうまいこと1位になれたという感じです。

―― それでポーランドとの結びつきができたの

でしょうか。

末廣　そうですね。そのコンクールの後に演奏会のお呼びがかかったりして、その後4年くらいは頻繁に行ってました。でも、ああいうお国柄ですから、西側に開けて来たとは言っても、経済的な向こうの負担が大きく、心苦しいというような気持ちもありましたし、日本でもそうなのですが、演奏会にだけ時間を取られずに、自分として勉強したいこともありましたので、いまはもうめったに行かなくなりました。

――　ところで、95年から4年間札響の指揮者を務められましたが、その頃の思い出をお聞かせ下さい。

末廣　普通、指揮者はそれが常任であっても何であっても、大体年間に10回も来れば多い方なのですが、私の場合は音楽教室なんかもやっていましたから、多い年で40回以上やっていまして、楽員の方とも本当に顔見知りになりましたし、全道ほぼくまなく回りましたので思い出は多過ぎるのです。まあ一番は、今はもう無くなってしまったようなのですが、グリーンコンサート、あれは毎年面白かったですね。外でやりますので天気に左右されるのですが、私は「晴れ男」ですので、ほとんど晴れていました。1度だけ大雨で体育館になったことがありましたけれど。尾高先生はいつも雨だったんだそうで、私はその逆だったですね。

美味しいものもいっぱいご馳走になりましたし、空気も美味しいですし、行った町行った町で知り合いもたくさん出来て楽しかったですね。

――　本当に文字通り専任の指揮者として過ごされたのですね。

末廣　そうですね。ただ、私がいた時期は、楽員の移動とか常任が変わったりとか、オーケストラ自体がすごくゴタゴタしていた時期でした。ですから、私の立場からするとえらく不幸な時期だったのです。きちんとした立場は与えられない、でもたくさん仕事はやらされる、ちゃんとしたお披露目があるわけでもない、というような状況でした。そういう意味では、残念だったなという思いもあります。

――　そういう経験から思われていることはありますか。

末廣　私が思ったのは、ヨーロッパでは一部の例外を除いては当たり前ですが、指揮者はやはりそのオーケストラの町に住み、演奏会だけではなく、その町の人々と触れ合うということが大切ではないかということでした。私は今でも、札響とは関係のない、仲良くなった一般市民の方に紹介されて札幌にマンションを持っていますし、札響にいた時は、演奏会で指揮することも大事だが、それ以外で札響のためになる仕事、例えば楽譜の整理であるとか、結果として多くのことは出来ませんでしたが、そういうことが大切だという意識で生活はしていました。

――　ともあれ、札響での経験は指揮者としての活動に何かのプラスになりましたか。

末廣　いや、それは何かどころの話しではありません。たくさん勉強させていただきました。

自分の欠点だとか、演奏する上で足りないところだとかをつぶさに指摘していただきました。私は、幸いにけんかをしたことがないのですよ。皆さん良くして下さいましたのでいろんなことを学びましたし、自分の欠点もはっきり自覚できました。

私が心がけていたことは、すべての楽員さんと等距離にいたいということでした。特定の楽員さんとの付き合い方で不協和音が生まれてはいけませんし、それをアドヴァイスして下さったのも楽員さんでした。ですから、このオーケストラで本当にたくさんのことを勉強しました。

――　最後に、将来への夢や目標をお聞かせ下さい。

末廣　こういう仕事をしている以上、あのオケで振ってみたいというようなこともちろんありますが、私はそれよりも、何で音楽をしてるんだろうかとか、世の中に音楽がある意味は何だろうかというようなことを考える人間です。音楽で人々の心を満たすのが仕事な訳ですから、究極的には音楽を聴いていただくことで世界が平和になればいいということだと思います。それが私の巨大な夢です。人々に音楽を通してそういうことを訴えるからには、自分も高みに行くよう精進したいと思います。　（佐藤良次）

平成16年度札響くらぶ総会より

本年度の総会で承認された事項の内、16年度活動計画、札響くらぶ会則の一部改正、役員についてその概要をお伝えします。会員の皆様には詳細な「総会報告」がすでに送られておりますので、詳しくはそちらをご覧下さい。

平成16年度活動計画

次の15項目が提案され、承認されました。

(1) 会報「札響くらぶ」の発行。(従来通り年4回の発行を継続)
(2) 札幌交響楽団の練習見学会の実施。(昨年度同様年2回の実施を検討)
(3) 第7回札響くらぶコンサートの開催。(時期・指揮者等未定)
(4) 他のプロオーケストラのファンクラブとの交流会の開催を計画。
(5) 札響楽員・札響事務局スタッフとの交流会開催。(年2回を目途に計画)
(6) 札響東京公演ツァーの計画。(最低参加希望者数が確保された場合に実施)
(7) 札響くらぶ会員の大幅拡大。(支部組織等の検討)
(8) ファミリー会員制度の新設。(会則の部分で説明)
(9) 入会申し込み用のパンフレット作成。(従来の用紙に代わるもの)
(10) 札響くらぶホーム・ページの充実。(全会報の搭載の作業中)
(11) 札幌交響楽団主催イベントへの協力。(地下街コンサートへの協力等を継続中)
(12) 札幌交響楽団支援特別会計の創設。(パトロネージュへの法人登録等)
(13) 札響支援のための札幌市議団との協力。
(14) メールによる情報提供。
(15) 「札響楽員名鑑」の更新を計画。

札響くらぶ会則の一部改正

将来のＮＰＯ化を視野に、会の目的、会員制度、役員、札幌交響楽団支援特別会計等について一部改正を行いました。

・会の目的

「札響の支援」「会員相互の交流」「音楽文化の普及、発展、向上に寄与」と目的を明確にしました。

・会員制度

ファミリー会員の制度を創設し、家族内の１名を一般会員、他はファミリー会員とし、ファミリー会員の会費は一般会員の半額とすることにしました。家族で入会している方々の負担を軽減し、会員数拡大を目指した改正です。また、10月以降入会者の会費半額の制度を廃止しました。

・役員

有名無実となっている運営委員を削除し、その役割は運営スタッフとすること。役割分担を明確にするため、事務局次長若干名を置くことを明確にしました。

・札幌交響楽団支援特別会計

第５回までの札響くらぶコンサートの運営費として積み立てた資金を原資とし、コンサート運営費、定期会員の拡大支援、維持会員登録費等に当て、会費の会計とは別立てとします。また、会員の皆様からのご協力も募ります。

役員

本年度の役員が次の通り決定しました。

会　　長　上田　文雄　　**副 会 長**　鈴木　美保
会計監査　細川　　馨　　笹原　俊一
事務局長　西川　吉武　　**事務局次長**　細川　　馨　　佐藤　良次　　武藤　義典
会　　計　前田　郁子

札響物語　28

亡命音楽家②

最近ピリオド楽器（古楽器）に熱中しOMA（エイジ・オブ・インライトメント管弦楽団）とツァーに出たり、レコーディングをしたり、また、酒を飲みながら聴く観客を相手にビートルズなどの音楽を演奏したりして世間の耳目を集めているヴィクトリア・ムローヴァは旧ソ連時代に西側へ亡命したアーティストの一人である。

モスクワ音楽院の学生だった1980年にはシベリュウス国際コンクールで、82年にはチャイコフスキー国際音楽コンクールでそれぞれ優勝して一躍その名を知られるようになった。

翌83年スカンジナビア方面のツァー中に西側へ亡命した。

この時、有名なコロンビア・アーティストと共にアメリカのクラシック音楽マネージメント業界を二分するショウ・アトラクションと言うエージェントから札響に電報が入り「本日ヴィクトリア・ムローヴァが当方へ到着いたしました。もし、興味があればご一報下さい」とあった。

さすがにアメリカである。亡命したその日に世界中へ打電したようだ。噂のムローヴァを呼べる機会があればと「札響のソリストに迎えたい」と返電した。すぐ返事が来て「日本へ行ける時には最優先に予定を入れます」とあった。

その返電のとおり、翌84年10月に初来日、札響を皮切りに日本ツァーをした。第252回定期演奏会でパガニーニのヴァイオリン協奏曲第1番ニ長調を岩城宏之の指揮で演奏した。

この曲は、数あるヴァイオリン協奏曲のなかでも高いレヴェルの技術を要求される、国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門の課題曲に選ばれることも多い難曲中の難曲で、ヴァイオリニストなら誰でもレパートリーに入れられる曲ではない。それだけに期待も大きいのだが、残念ながらこの時のムローヴァの演奏は目を見張るものではなかった。

亡命が与える精神的なストレスは経験したことがない我々には計り知ることが出来ないが、ピアニストのウラジーミル・フェルツマンは亡命後何年も舞台へ上がれなかったほどだった。

20代のムローヴァにとって、亡命のストレスに加えて、耳馴染んだヨーロッパとはサウンドの違うアジアのオーケストラとの初協演で、戸惑いが先に来たのかなとも思われる。

しばらく後に、元札幌市長故板垣武四氏がイタリア旅行中に、赤ちゃんを背負って右手に楽器左手に衣装ケースを提げ、演奏旅行をしていた逞しいムローヴァと飛行機で一緒になったそうだ。

娘は弱し、されど母は強し。逞しいムローヴァの演奏を札響の定期で聴いてみたい。

（竹津宜男）

from「札響くらぶ」

第1回練習見学会について

昨年度と同じく、札幌交響楽団が行う公開リハーサルを今年度第1回の練習見学会とします。札幌交響楽団から発表されている日程等は次の通りです。

日　時　8月25日（水）　10：40開始　13：00終了（予定）
場　所　札幌コンサートホール・キタラ　大ホール
注　意　10：20開場予定（定員は800名を予定）
途中休憩時間以外は、開始後の入退場はできません。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　ヴァイオリン奏者

佐藤（さとう）　郁子（いくこ）さん

ご出身は

札幌です。高校卒業までは札幌で、東京芸大に進学し、また札幌に戻り、札響に入りました。

ヴァイオリンはいつから

３歳から始めました。最初はピアノを、と言う話もあったようですが、母が「一生楽しめる音楽なんていいんじゃない」と言っていたら、母の友人の方が「ピアノは、子どもも大人も同じ楽器だけど、ヴァイオリンは成長に見合ったサイズの楽器があるので、その方がいいんじゃない」と勧めてくれてヴァイオリンになったようです。

ヴァイオリン奏者になろうと思ったのはいつごろですか

高校を受ける時に、ずっとヴァイオリンを続けようかということは漠然と考えていました。それで、好きなことを自由にやれそうだということで札幌南高に進学しました。でも、ある程度明確にヴァイオリン奏者に、と思い始めたのは大学受験の頃からだと思います。

札響入団までのいきさつは

大学卒業後、すぐ札幌に戻ってきました。それから１年半くらいフリーで活動していまして、札響のエキストラもやらせていただきました。そのうちにオーケストラに入団したいと思い、どうせなら子どもの頃から親しみのある札響にと思い、オーディションの機会を待っていました。そうしたら、一昨年の11月にオーディションがあり、去年の２月に入団することになりました。

入団してみての札響はいかがでしたか

アット・ホームな感じでした。人間関係でも、皆さん思いやりを持って接して下さいますし、勉強しやすい雰囲気だなあと思いました。室内楽なんかもやりたいなと思っていましたが、皆さん進んでやろうと言って下さいますし、団結力みたいなものも強い感じです。

趣味はお持ちですか

何かを深く、というようなものはありませんが、なんでも少しずつという感じです。例えば、テニスやスキーといったスポーツもしますし、遊園地やプラネタリウムにも行けば、食べ歩きもするといった具合です。

今までの演奏活動での思い出は

札響のエキストラで出演した2002年３月の東京公演が思い出深いですね。周りの楽員の皆さんの緊張感がひしひしと感じられ、ソロも含めて、ステージ上であんなに緊張したのは初めての経験でした。皆が全部を聴いているというような、とぎすまされた感覚に満ちていました。

道内公演はいかがですか

道産子ですが、自分が育った札幌の一部以外は、地名や道など北海道のことは全然知りませんでしたから、びっくりするようなことがたくさんありました。こんなところで本当にお客さんが来るのだろうかと思っていると、ちゃんと開演の時には集まって下さっているとか、信じられないくらいの寒さを体験したりだとか、多くの経験をしました。

将来の夢をお聞かせ下さい

正直言って、今のところは次々にくる曲に追われているという感じで、将来のことを考えている余裕はないというところです。

でも、せっかくこういう環境にいるのですから、少し余裕が出来たら、カルテットなどでいろいろな曲を演奏してみたいですし、ステージ以外の人間関係も豊かにしていければと思っています。

札幌交響楽団　テューバ首席奏者

玉木（たまき）　亮一（りょういち）さん

ご出身は

札幌生まれで千歳育ちです。３歳から千歳でしたから、千歳出身と言っていいかもしれません。

音楽との出会いは

千歳の北栄小学校４年生の時に、金管楽器だけの純粋なブラスバンドに入団したのが始まりです。学校の花形で、学校挙げて応援してくれているという存在でした。

テューバはいつから

その、小学校のスクールバンドに入った時からです。ですから、小学校、中学校、高校、大学とずっとテューバ一筋で、ほかの楽器には触ったことがないと言っていいほどです。昔のことですから記憶は定かではなく、最初は与えられたのか、自分で選んだのかは分りませんが、とにかく小学校で始めた時からテューバは好きでした。音も好きだったのでしょうし、複雑な構造をしている楽器なのでメカニカルな魅力も感じたのかもしれません。

現在感じているテューバの魅力とは

まずは音でしょうね。低音の響きに魅力を感じます。また、合奏の中で低音で支える役割も魅力的ですが、独奏楽器としてメロディーも演奏できるというような多様性に強く魅力を感じています。

将来はプロにと思ったのはいつ頃ですか

高校生の頃でしょうか。音楽大学進学を考えた頃だと思いますが、強く考えるようになったのは大学時代だと思います。

札響入団までのいきさつは

大学に入って、いろいろなことを知りましたが、まずは、オーケストラには普通テューバ奏者は一人しかいない、日本のプロのオーケストラでテューバ奏者を抱えている規模のオーケストラは20くらいしかないということです。ということは、日本全国でプロのオケのテューバ奏者の定員は20人で、一方テューバをやっている学生は何百人もいるわけですから、チャンスが大切だということを身にしみて感じました。そんな中で、札響のオーディションがあるということを知ったということは、本当にチャンスに恵まれたとしか言いようがありません。昨年の12月にオーディションがあり、カーテン審査で、奏者の名前も出身も伏せられての選考でしたが、合格することが出来、今年の４月に入団しました。

入団してみての札響はいかがですか

「札響の危機」が伝えられ、本当に残念な気持ちでいました。しかし、入団してみて、前からいたわけではないのでどこがどういう風にとは言えませんが、札響はまさに変わっている最中なんだな、という気がしています。ポップスやシンフォニック・ブラスも定期化していますし、定期会員の数もほぼキタラの客席数に達しているなど、他のオーケストラでは考えられないことだと思います。本当に素晴らしいことだと思っています。

何か趣味はお持ちですか

読書ですね。以前は本を読むことは少なかったのですが、３年間アメリカに留学していた時に、日本語に興味を持ち、読書を始めました。特に、アメリカでは９・11も体験しましたので、日本の激変期である幕末から明治・大正の頃に興味を持ち、司馬遼太郎の小説を愛読しています。あとは、ドライブくらいですね。

楽員として意気込みと夢を

幸いに入団出来ましたが、プロになれたからいいやというのではなく、自分はまだ成長段階だと思っていますから、オーケストラの中で勉強しながら、自分の可能性にチャレンジをしていきたいと思います。札響も成長していくと思いますが、自分もそれ以上に成長していきたいと思います。そして将来の夢は、プレーヤーの義務として、後進の指導という教育に携わっていけることです。

（佐藤良次）

from 「札響くらぶ」

会費の納入はお済みですか

6月に会費納入のご案内が送られています。会則の改正を受け、振替用紙は前年度の登録内容のままの場合の金額が印字されたものと、ファミリー会員制創設により、新たにファミリー会員登録をする等の内容変更用の金額が印字されていないものの2種類をお送りしました。まだ納入されていない方は、登録内容をご検討の上、早急にお近くの郵便局からの納入をお願いいたします。

なお、会則の改正により、1年間会費の納入がなかった場合退会扱いになります。また、10月以降入会者の会費半額の制度もなくなりましたのでお気を付け下さい。

第2回交流会、練習見学会について

第1回の交流会は4月17日、第6回札響くらぶコンサート終了後に実施済みです。また、第1回練習見学会は、8月25日に札響の公開リハーサルに合わせて行われます。

今年度第2回につきましては、交流会、練習見学会共に10月の実施を予定して詰めの段階に入っています。今後、札響事務局との話し合い等を通じ、なるべく早目に会員の皆様にお知らせできるように努力いたしますので、今しばらくお待ち下さい。

なお、第2回の練習見学会につきましては、例年通り、芸術の森での実施となるものと思っております。

ファンクラブとの交流会について

他のファンクラブとの交流は積極的に進めていきたいと考えております。特に、今までのいきさつから、仙台フィルハーモニークラブ、山響ファンクラブとの交流は大切にしていきたいと思っています。

一昨年は仙台から札幌に来ていただき、昨年は仙台を訪問いたしましたので、今年は札幌に来ていただければと思っています。出来れば10月に予定している札響くらぶの第2回交流会に合わせられればと思っていますが、先方のご都合もおありでしょうから、これから具体的な交渉ということになると思います。

実現する折には、会員の皆様の積極的なご参加をお願いいたします。

定期演奏会プログラムに尾高さんの新連載

もうご覧になった方も多いと思いますが、定期演奏会のプログラムに4月から「マエストロ・チュー尾高忠明の音楽生活」が連載されています。「チュー」は言うまでもなく尾高さんの愛称「忠さん」の「チュー」です。

28号でお伝えした通り、尾高さんは5月1日付けで岩城宏之さん以来札響にとっては二人目の音楽監督に就任されました。それについて尾高さんは5月定期の「尾高忠明の音楽生活」で、いくつかのオーケストラから音楽監督の就任を要請されたが、オーケストラと一体になって演奏したいという気持ちから、「音楽監督」という職務に納得がいかず断ってきましたが、「新しい形の〈音楽監督〉があり得るのではないか」と思い「ご存じのように私たちは現在、再建途中です。この困難な時期を乗り越えるためにも、今回の要請をお引き受けして、オーケストラと共に邁進していく覚悟でおります」と述べておられます。

札響のため、一層のご尽力を期待し、連載も楽しみに読ませていただきたいと思います。

編集後記

最近、札響のチケットの売れ行きが好調なようです。定期演奏会も好調、シンフォニック・ブラスも大盛況、「札響ポップス」は新聞報道では1カ月前には完売、来年3月に厚生年金会館での開催が決定とのことです。

誠に喜ばしい限りで、札響の楽員、理事会、事務局一体となっての努力が芽を出して来たと見てよいのでしょう。しかし「好事魔多し」とも言います。気を引き締め、札響くらぶも更に応援していきましょう。　（佐藤良次）